

氏 名：江口 優子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲第 216 号

学位授与年月日：2022 年 3 月 10 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論文審査委員：主査 縄 秀志（聖路加国際大学教授）

副査 榊原 哲也（東京女子大学教授）

副査 大田 えりか（聖路加国際大学教授）

副査 山田 雅子（聖路加国際大学教授）

論 文 題 目： 漢方医学を学んだ看護師の看護実践の経験

#### 博士論文審査結果

訪問看護師として療養者が心身の不調を抱えながら生活するためのケアを模索する時期に東洋医学と出会い、東洋医学を学ぶ中で看護を捉えなおす自らの体験から、漢方医学を看護師が学ぶことは、看護の基本に立ち返る機会や看護実践に変化をもたらす可能性があると考え、本研究の着想に至った。本研究は、漢方医学を学んだ看護師の看護実践の経験について、現象学的アプローチを手掛かりに、言葉にならない気づき、本人も自覚していない、意味を帯びた「生きられた経験」を解明することを目指すものであり、新規性・オリジナリティが高く、先駆的研究としての価値が認められた。

機縁法を用いて漢方医学を学んだ経験を持つ 3 名（A さん、B さん、C さん）を対象に、経験の中心となることを、経験の「成り立ち」や経験の「意味」が示されるように構成し、生きられた経験として記述している。

A さんの経験の記述では、大学病院での経験の後に、出産後職場復帰した和漢外来で漢方医学と出会い、漢方医学を学びながら「漢方っていうケア」へ至る意味が示されていた。

B さんの経験の記述では、中国で看護師資格を取得する中で、漢方医学と西洋医学の両方を学びながら漢方医学と看護の接点をつくる経験の意味が示され、日本で訪問看護の経験を積むの中で「その人の養生を支える看護」の意味が示されていた。

C さんの経験の記述では、総合病院での経験の後に、仕事への行き詰まりを感じた時期に漢方外来に配属され、漢方医学を学びながら漢方薬を飲む経験を積み、今までの医療の場とは別の世界で「日常を取り戻すことを支える看護」の意味が示されていた。

3 名の看護師の語りから、「漢方医学を学んだ看護師の看護実践の経験」は、生活に視点を置き、患者をトータルにみて、互いに養生して生きる人間同士として、自らを気に向け、主体的に自分をケアして生きていくことを支える経験であることが解明された。

考察では、本人も意識されない背後にある「意識の志向性」の働きや「意味」に目を向ける現象学的アプローチについて、フッサールの哲学を手掛かりとして深く検討されていた。「生活に視点を差し向ける漢方」の看護の在り方は、看護師が生活に向けたケアの視点を習慣化する経験の中で態度として成り立っており、生活行動の意味を広げる感性を養い、意識的にケアを意味づけることをもたらししていた。漢方を学ぶことは、自分を含めたすべての人々が自らの生を養って生きていくという考え方を育み、本来の看護に立ち戻させる意味があることが明らかにされた。

審査会での質疑応答は充分であったが、以下の点に修正が必要であると指摘された。

1. 方法論として現象学的アプローチを選択した理由ならびに方法論に関する考察を深めること。
2. 「経験の成り立ち」には「構造」と「発生」の両方の意味がある。漢方医学を学んだ看護師の経験の発生的成り立ちをより明確にし、「意味」と「志向性」についての気づきをもとに、個別性を深めた記述をすること。
3. 対象者が 3 名になった理由を明示すること。
4. 西洋医学と東洋医学と看護学の関係について、看護教育への示唆や PCC の視点を加えた考察をすること。

再提出された論文で指摘事項が加筆・修正されたことが確認できた。

以上により、本論文は、本学学位規定第 5 条に定める博士(看護学)の学位を授与することに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うことに必要な高度な研究能力と豊かな学識を有すると認め、論文審査ならびに最終試験に合格と判定する。